



(撮影 村上宗一郎)

グラビア・インタビュー ②

えのもと うたよ
榎本 韻世

(皮膚科医・医学博士)

ドイツ留学でつかんだ自信で 皮膚科医+αの自分を生きる

偶然見かけたドイツ語学校の看板が新境地へ導いてくれた

両親とも歯科医で、親戚にも医師や歯科医師がずらり顔を揃える一族に生まれ育った榎本韻世さん。幼い頃は引っ込み思案の少女だったそうですが、声楽の夢を傍らに置いて帝京大学医学部に進学、皮膚科医の道を歩みます。足に合わない靴の悩みがやがて彼女をドイツに導くことになるのですが、それはさておき、現在は医師としての顔だけでなく、自然医療や翻訳、アプリの制作まで、多彩な活動を繰り広げています。ご自身のスタイルを開花させた榎本さんに、ここに至るまでの道のりをうかがいました。

命に別状はないけれど 皮膚科が果たす大きな役割

— まず、先生のご専門についてお聞きしたいのですが。

皮膚科の専門医です。一般的な皮膚科の治療だけでなく、在宅診療や外国人の診療、美容皮膚科医としても働いています。

— 美容皮膚科というのは具体的にどのような診療をするのでしょうか？

ニキビの治療から、シミやシワの除去、それから、いわゆるアンチエイジングの分野まで広くカバーしています。皮膚のトラブルや悩みは、それ自体は命に別条がないけれど、生活の質という面で、時には人生を左右する大きな意味合いを持ちます。たとえば、ひどいニキビで悩んでいる患者さんに、「ニキビは青春のシンボル」「人は見かけじゃないよ」などとは言えませんよね。治療して肌がきれいになった患者さんは生きていくうえでの自信を取り戻します。表情が明るくなり、メンタルもポジティブに変わっていくのです。そういう患者さんの様子を見ると、この仕事をしていてよかったと思いますね。

— 皮膚科を選ばれたきっかけは何だったのですか。



▲2012年、ドイツの女性カメラマン Herlinde Koelbl 氏のモデルを務めた。白衣姿とオフの姿を撮影

私はもともと皮膚が弱くて、吹き出物が絶えず出ていました。どんな化粧品を使っても肌がかぶれたりして治らず、悩みの種でした。大学に入って皮膚科の担当教授に相談したら、「いま使っている化粧品は全部やめなさい」と言われ、実践してみたんです。そうしたら吹き出物がぴたりと治まって…それで、自分が皮膚の悩みを抱えていたことも医者として役立つのではと思いました。

医師の適性の高さを見抜いた 両親の勧めで医学部受験

— そもそも医者になろうと思ったのはなぜですか。

実家が歯科の開業医でした。父はインプラントを日本で先駆けて手がけた歯科医で、いまは大学で客員教授をしています。母も歯科医で、きょうだいや親戚にも医者、歯医者がずらりと揃っています。でも自分としては、口の中の治療だけではつまらないと感じていました。当時はやっていた『動物のお医者さん』というマンガが好きで、獣医がいいなと思ったり…。ピアノと声楽をずっと習っていて、音楽の道へ進みたいという希望も持っていました。

— 結果として医師への道を選ばれました。



▲大学時代に同級生とスキーへ



(撮影 村上宗一郎)

やはり親や親戚に説得されたり丸め込まれたり、いろいろありました(笑)。医大へ行っても音楽は続けられるとか、医大に合格したら音楽もちゃんとした先生を付けてあげるとか。ただ、そのときに周りが揃って口にしたのは、「20年後にきっと良かったと思えるから医者になったほうがいい」ということでした。今となってはそのとおりで、私の適性や将来性を真剣に考えてくれたことに感謝したいです。

— 具体的にいつ頃、医学部を目指そうと決心なさったのですか。

もともと理科が好きで得意だったので理系コースにはいたのですが、決心したのは高2の終わりから高3になる頃です。少し遅いほうかもしれませんが。高校は、新潟県立三条高校です。進学校で、いわゆる詰め込み式ではなく、ディスカッションや自主性を重んじる教育方針の学校でした。生徒はみんなよく勉強する子たちで、私も受験前に予備校の夏期講習に通った以外は、自分でひたすら問題集に取り組んで勉強していました。

予想を超える激務に 突発性難聴を発症

— 帝京大学の医学部へ現役で合格されたと聞いています。学生生活はどうでしたか。

世の中はバブル景気の真ただ中でしたが、私は地味に勉強していました。都会の高校からきた生徒のなかには、東京コレクションに出るような才色兼備の人もいて、その華やかさがまぶしかったですね。

— アルバイトやクラブ活動はなさいましたか。

はい。アパレルショップでアルバイトをしていたので、いまでも服をたたむのは得意ですよ。あとは夏休みに実家の仕事の手伝いもしました。クラブ活動は軽音楽を少し…。ただ、大学も後半になると本当に授業が大変で、決して要領がいいとは言えない自分は、アルバイトやクラブどころではありませんでした。

— 卒業後に医局へ入ってから、いったん外へ出られたそうですね。

ええ。3年目に医局人事で防衛医大に助手



(撮影 村上宗一郎)

として派遣されました。母校である帝京大は、親の跡を継いで医者になる人が多いせいも、比較的のんびりした雰囲気だったんです。ところが防衛医大は臨床も研究も論文も、周りがバリバリやる人ばかりで、どうにかそれについていこうと必死でした。たくさん勉強して論文も書いて、毎日すごく怒られて…。仕事もつらくて、夕方になるとよくトイレで泣いていました(笑)。防衛医大には3年ほどいて、その後に院生として母校へ戻りました。——院生になってからはどんな仕事をなさっていたのですか。

主に診療や先輩の手伝い、学生の指導、そのほか院内での往診もありました。また、「自己免疫」をテーマにした博士論文を書きました。

その後、大学からの派遣で、東京警察病院で医局長として働きました。そこにいた3年間はお昼ご飯を食べる時間もないほど忙しく、診療漬けの日々でしたが、臨床の基礎が身についたと思います。でも、過労のせいでしょうね、突発性難聴にかかってしまい、病院を去ることになりました。

自然と共存する医療に ドイツで眼を見開かされた

——最初に留学されたのはそのあとですか。

警察病院を辞めたあと、先輩からレディースクリニックに誘われ、美容皮膚科医として勤務しました。3年経って、別のクリニックに移ることになるんですが、その転職の合間を縫って1カ月、ドイツへ語学留学しました。

きっかけは、警察病院時代に趣味でドイツ語を習っていて、たまたま参加したフットケアのセミナーでドイツ人講師にドイツ語であいさつしたら、すごくほめられたんです。それですっかりその気になって留学を決めました。ボンのゲーテ・インスティテュート(国営の語学学校)に通ったのですが、声楽を習っているときドイツ語の歌曲を唄っていたので上達が早く、テストでは学校、居住などの目安となる「B1」というクラスに合格しました。

——その後、医学を修めるために再びドイツへ留学されますね。

日々の仕事は順調でしたが疲れていました。薬中心の医療にも限界を感じていた時期に、ドイツの自然医療の本に出会い、新しい世界を知ったのです。するとどうしても勉強したくなって、今度は医学留学することに決めました。



▲ドイツの友人宅で、にわか寿司職人

— 現地でどんな勉強をなさったのですか。

約1年間の留学で、「クナイプ」の医師アカデミーに通いながら、自然医療にもとづいて運営されている療養所の見学や実習を体験しました。そのアカデミーに入ったアジア人は私が初めてだそうです。免疫疾患はステロイドに頼らなくても、自然の植物などを活かした治療をはじめ、食べ物や気持ちの持ち方、生活によって状態が変わることを学び、なるほど!と腑に落ちました。私の博士論文も「自己免疫」でしたから。皮膚のトラブルや過労、食事、生活リズム…いろいろなことが私の中でつながったんです。さらに、現地の方の紹介で、著名な開業医のもと臨床研修もしました。そこでは新薬の治験など、最先端の治療に触れることができ、毎日、目を見開かれるようなことばかり。密度の濃い時間を過ごしました。

— 医学以外にドイツで興味を持ったことはありましたか。

ドイツの食べ物というとパンとビール、ソーセージというイメージが強いと思うのですが、実際にはずっと豊かな食材と食文化があります。友人に招かれたり、ホストファミリーの農家で伝統料理を食べる機会があり、俄然興



▲昨夏もドイツへ。ミュンヘン大学皮膚科スタッフと

味が湧いて、医学にも通じる栄養学も学びました。ドイツ料理の勉強や普及は、いまや私にとって第二のテーマ。いつかそれらを含めた自然医療の本を翻訳し、出版したいという夢もあります。

自分を育ててくれた社会に恩返しを

— ドイツ式フットケアの資格をお持ちだそうですね。

フットケアは、ドイツ語ではフスフレーゲと言います。これに取り組むようになったきっかけは、警察病院時代にリュウマチや整形外科の患者さんの足のトラブルの処置をしたり、肺がんの治療薬の副作用で皮膚や爪に異状が出た患者さんを診る機会があったことです。爪を切ったり角質を削ったりするだけでなく、正しい靴の選び方や足の病気のケアもする必要を感じて、靴の専門家との連携を始めました。2007年にフスフレーガーという資格を取得し、いまま講習会に出たり認知度を高めるべく啓蒙をしたりしています。

— 訪問診療もなさっていると。

はい。在宅医療は、看護師や施設の方とのチーム医療であり、やりがいのある仕事です。“老化のトラブルシューティング”という面で、フットケアをはじめ、これまで私が得た



▲ドイツ語が堪能。写真は自然医療の専門書

様々な知識や体験がとても役に立っています。足のケアに手が回らないと、爪が伸びて趾（あしゆび）に食い込んで歩けなくなるなどのトラブルにつながり、高齢者には大きな問題です。在宅診療を行うことで、自分を育ててくれた社会へのお返しになるのではないかと考えています。

— 今後はどんな医療を目指していきたいですか。

私は、ライフスタイルや心のありようが、ホルモンバランスなど体のいろいろなところに影響して健康を左右すると考えています。これからの時代は特に、医師はどうしたら患者の人生の質を上げられるかに力を注ぎたいですね。健康のカギは身近なところにあると思うんですよ。それに気づいて、パズルのピースのように組み合わせ、元気になるお手伝いができればと思います。

— 最後に、これから医師を目指す学生にメッセージをお願いします。

医師は専門職であると同時に、橋や道路のように社会の安全を守るインフラであると思っています。人への敬意や愛情、学びの姿勢を持ち続けるとともに、常に社会への責任を忘れてはいけません。これから医師を目指す人には、「人のために」「自分の成長のために」「社会のために」という三つのことをぜひ心



(撮影 村上宗一郎)

に留めていただきたいと思います。

優等生ではない私自身、簡単な道のりではありませんでしたが、苦しいことや辛いことがたくさんあったからこそ、人の弱さに寄り添う気持ちを忘れずにここまで来れたような気がします。

自分自身が幸せに生きること、やりたいことをやることも大切にしてほしいと思います。

(聞き手・執筆 三好達彦)



▲自宅のベランダでハーブを育てている

Profile 榎本 韻世 (えのもと・うたよ)

新潟県生まれ。医学博士。帝京大学医学部医学研究科(大学院)皮膚科学卒。同大医局ならびに防衛医科大学校病院にて研修ののち、2004～2007年東京警察病院に勤務。池下レディースクリニック皮膚科医長、むさし藤沢皮膚科院長を務めた。2012年、ドイツへ留学。バイエルン州クナイブ医師アカデミー自然医療コース修了。同地のクリニックで皮膚科臨床研修。2013年に帰国、皮膚科一般のほか在宅診療、外国人診療、美容皮膚科まで広く医療に携わり、活躍の場を広げている。2018年6～8月ミュンヘン大学皮膚科病院で臨床研修。FSI認定フスプレーガー(ドイツ式フットケア指導資格)。日本皮膚科学会認定皮膚科専門医。